

別紙 2

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 ポッペ クレメンス ピーター

この課程博士学位請求論文の審査は、(主査) 田中伸一、(副査) 伊藤たかね、矢田部修一、ティモシー・バンス (国立国語研究所)、田中真一 (神戸大学) の5名によって行われた。公開審査は平成 27 年 1 月 9 日 (金) 15 時から、18 号館コラボレーションルーム 2 において行なわれた。論文題目は Word Prosodic Structure in Japanese: A Cross-Dialectal Perspective (日本語の語レベルの韻律構造: 通方言的な視点から) である。以下、審査結果の要旨を報告する。

本博士論文は、日本語の語レベルの韻律構造を通方言的な視点から明らかにすることを試みた研究である。語レベルの韻律構造がどのような構成素から成るかという問題、そしてその構成素がアクセントや音調などの韻律素性とどう影響し合うかという問題を、日本語のいくつかの方言に基づいて、理論的・実証的に解明することを目的としている。

本論文は、序論と結論を除き、5つの章から構成されている。序論の章では本研究の目的を明らかにし、依って立つ理論的枠組みを紹介している。具体的には、全体の理論的枠組みとして最適性理論 (Optimality Theory)、音韻表示の理論として自立分節音韻論 (Autosegmental Phonology) と韻律音韻論 (Prosodic Phonology)、音韻論と形態論のインタフェースに関しては間接照合仮説 (Indirect Reference Hypothesis) を採択している。

第 2 章では、日本語の語レベルの韻律構造についての先行研究を概観しつつ、韻律語 (prosodic word) の下位に存在するとされてきたフット (foot) が、必ずしも韻律形態論的プロセスの説明において妥当であるとは限らないことを指摘し、韻律語幹 (prosodic stem) に基づく分析の可能性について論じている。つまり、語レベルの重要構成素として、フットと韻律語間の競合する役割を導入しているのである。

第 3 章では、東京方言アクセントに対するフットに基づいた先行研究の分析を広範かつ詳細に紹介しつつ、新たに音調だけにに基づくオリジナルな分析を提案し、両者の比較を行っている。そして、外来語アクセントと一般複合名詞アクセントに関しては、音調に基づく分析がフットに基づく分析に匹敵する (同じ経験値と説明力を持つ) ことが主張されている。つまり、東京方言は従来からフットの存在が指摘されてきたが、音調に基づく分析も可能であることから、いずれが妥当かは更なる理論的・実証的検証が必要であり、その検討が本論文の以下の章で扱われる諸方言のアクセント現象の分析に委ねられている。

第 4 章では、静岡県浜松市舞阪方言のアクセント体系の分析が提示され、この方言に見られるアクセント交替を説明するために、フットが不可欠であることが結論付けられている。具体的には、東京方言の研究で提案されてきた 1) 強弱フットと弱強フットの共存 (デフォルトは弱強フット)、2) 1 モーラからなるフット、3) 無アクセントのフットの3つが必要であるとされる。

第 5 章では、通言語的に珍しい現象である音調と母音の相互作用に焦点を当て、松江方言・市原方言・金沢方言では、アクセントと句音調の高調 (H) が特定の環境で狭母音 (i, u)

を含むモーラへの付与が避けられる事実を指摘し、理論的な分析を展開している。そして、類型論的・形式理論的に重要な結論を導きつつも、フットがここでも有効であることが示されている。

第6章では、東京・静岡・市原・松江・舞阪の各方言の動詞活用形に見られるアクセント交替を分析しつつ、韻律語幹という韻律表示上の領域と、活用形間対応制約という計算上のメカニズムが両方必要であることを主張している。また一方で、これらの方言では動詞活用形のアクセントが韻律語幹の最右端のフットに付与されることから、フットも存在することが示されている。

最後に、結論の章では、全体を通して日本語の語レベルの韻律構造について明らかになった成果と、今後の課題について総括されている。ここで、諸方言のアクセントと音調の分析検証の結果、フットと韻律語幹という2つの構成素が音韻表示に共存し得るという類型論的・形式理論的に重要な結論が導かれた。

本論文の評価として、その新しさや意義を挙げるなら、次のようにまとめられよう。まず記述的な価値として、通言語的に珍しい現象である音調と母音の相互作用に注目し、(記述研究やフィールドワークに基づいて)従来は形式理論で取り上げられなかった諸方言の新しいデータを発掘して、理論的意義の大きな結論を導いている点が挙げられる。さらに、理論的な価値としても、従来の理論分析の対象が専ら東京方言に集中し、そのアクセント体系の理論的解釈に議論の余地が残されていた背景の中で、東京方言と諸方言を包含する統合理論を唱えて論争に終止符を打てたことも注目に値する。この統合理論は韻律階層(Prosodic Hierarchy)とリズム階層(Metrical Hierarchy)の両方を音韻表示に備えた新規性の高いものであり、それを諸方言から明確に裏付けた価値は大きい。また、分析の道具として採用した最適性理論について非常に広範かつ深い知識を有し、諸方言のアクセントや音調に関して精密かつ明晰に分析できたことは、特筆すべき成果である。全体としては、類型論的にも形式理論的にも意義の大きな統合理論を新しく提案するものであり、理論と記述のバランスの取れた高レベルの独創的研究であると結論付けてよいだろう。

このように記述的価値や理論的意義について高く評価された成果があった一方で、いくつかの問題点も指摘された。まず論文の形式としては、先行研究の説明に紙面を費やすあまり論点が見えにくくなる嫌いがあったこと、問題とする言語形式のローマ字表記に不統一が見られたこと、論文の独創性や新しい提案を控えめにせずもっと全面に出してよいこと、などが指摘された。また論文の内容としては、いくつかの事実の理論的解釈に関して、確認を求められるまたは疑義を呈される事例が複数の審査委員から指摘された。また、動詞活用形のアクセントについて、提案されている理論分析では説明できない事例が一部あることも示唆された。これらはすべてもっともな指摘であった。

しかし、これらは全体の価値を揺るがすほどのものではなく、最後の例外となる事例に関しても補助仮説の修正により解決できる見込みが高いので、その信頼性が損なわれるわけではない。総合的には、形式・内容ともに水準以上の力作であるとの審査員全員の合意を得たので、審査委員会としては博士(学術)の学位を授与するにふさわしいと認定する。